

サウンドデザイン演習 2020
女子美術大学・遠隔授業（補講動画）

動画 12

【講義4】 西欧近世の音楽
～ ルネサンス、主権国家体制、人間中心主義の萌芽と音楽

動画配信：2020-8-16

講義担当：石井 拓洋
ishii05042@venus.joshiabi.jp

2020

講義4で話すこと

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする時代的変遷（概観）
2. 〈神中心の中世〉から〈人間中心の萌芽の近世〉へ：なぜそれは起こったか
3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ
4. 近世〈主権国家体制〉が生んだ音楽：絶対王政下のバロック音楽

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする時代的変遷（概観）

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする音楽の時代的変遷（概観）

前400年頃～467年頃（西ローマ帝国滅亡の頃まで）	古代的あり方(註1) = 〈人間以外の力〉（=自然）と音楽（ムーシケー、ピタゴラス）
467年頃～1470年頃（ビザンツ帝国の滅亡の頃まで）	中世的あり方 = カトリック（=神）と音楽（グレゴリオ聖歌、ミサ典礼音楽、多声音楽）
1470年頃～1780年頃（フランス革命の頃まで）	近世的あり方 = 王侯（=人間）と音楽（ルネサンス、バロック音楽 = オペラ、主権国家体制 = 絶対王政）
1780年頃～1970年頃（ポストモダン思想台頭前まで）	近代的あり方 = 人間理性による音楽（絶対音楽、十二音音楽、電子音楽、偶然性、他）
1970年頃～今	現代的あり方 = 音楽をあらためて〈音（楽）が発生する自然な文脈〉へと戻す試み（註2）

註1). このような言い方は音楽史において一般的ではなく、藝術の歴史展開を理解するために用いた石井による便宜的表現であることに注意。

註2). サウンドスケープ、シアターピース、ライヒのミニマル、物語と共にある音楽等。あるいはある種の商業音楽やインタラクティブを志向する音楽もここに分類可。

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする音楽の時代的変遷（概観）

前400年頃～467年頃（西ローマ帝国滅亡の頃まで） 古代的あり方(註1) = 〈人間以外の力〉 (=自然) と音楽 （ムーシケー、ピタゴラス）

467年頃～1470年頃（ビザンツ帝国の滅亡の頃まで） 中世的あり方 = カトリック (= 神) と音楽 （グレゴリオ聖歌、ミサ典礼音楽、多声音楽）

1470年頃～1780年頃（フランス革命の頃まで） 近世的あり方 = 王侯 (=人間) と音楽 （ルネサンス、バロック音楽 = オペラ、主権国家体制 = 絶対王政）

1780年頃～1970年頃（ポストモダン思想台頭前まで） 近代的あり方 = 人間理性による音楽（絶対音楽、十二音音楽、電子音楽、偶然性、他）

1970年頃～今 現代的あり方 = 音楽をあらためて〈音(楽)が発生する自然な文脈〉へと戻す試み（註2）

註1). まさにこの言い方（「古代的あり方」等）は、音楽史において一般的ではなく、藝術の歴史展開を理解するために用いた石井による便宜的表現であることに注意。

註2). サウンドスケープ、シアターピース、ライヒのミニマル、物語と共にある音楽等。あるいはある種の商業音楽やインタラクティブを志向する音楽もここに分類可。

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする音楽の時代的変遷（概観）

前400年頃～467年頃（西ローマ帝国滅亡の頃まで）

古代的あり方(註1) = 〈人間以外の力〉 (=自然) と音楽 (ムーシケー、ピタゴラス)

467年頃～1470年頃（ビザンツ帝国の滅亡の頃まで）

中世的あり方 = カトリック (= 神) と音楽 (グレゴリオ聖歌、ミサ典礼音楽、多声音楽)

1470年頃～1780年頃（フランス革命の頃まで）

近世的あり方 = 王侯 (=人間) と音楽 (ルネサンス、バロック音楽 = オペラ、主権国家体制 = 絶対王政)

1780年頃～1970年頃（ポストモダン思想台頭前まで）

近代的あり方 = 人間理性による音楽 (絶対音楽、十二音音楽、電子音楽、偶然性、他)

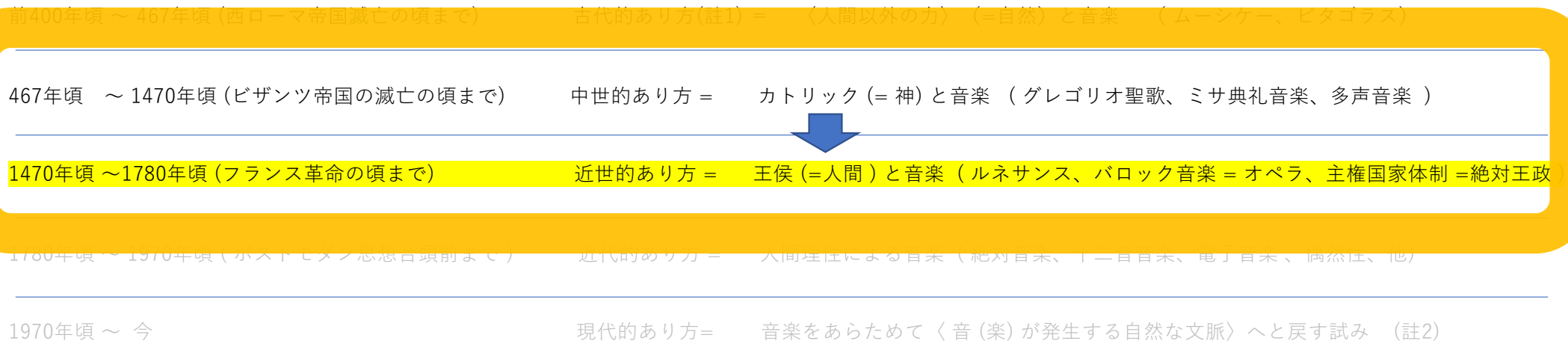
1970年頃～今

現代的あり方 = 音楽をあらためて〈音(楽)が発生する自然な文脈〉へと戻す試み (註2)

註1). このような言い方は音楽史において一般的ではなく、藝術の歴史展開を理解するために用いた石井による便宜的表現であることに注意。

註2). サウンドスケープ、シアターピース、ライヒのミニマル、物語と共にある音楽等。あるいはある種の商業音楽やインタラクティブを志向する音楽もここに分類可。

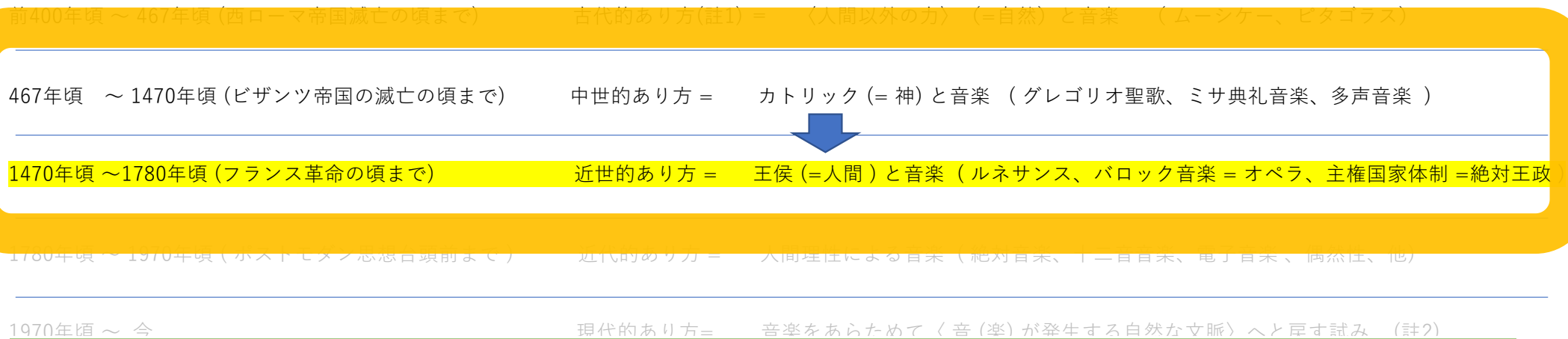
1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする音楽の時代的変遷（概観）



註1). このような言い方は音楽史において一般的ではなく、藝術の歴史展開を理解するために用いた石井による便宜的表現であることに注意。

註2). サウンドスケープ、シアターピース、ライヒのミニマル、物語と共にある音楽等。あるいはある種の商業音楽やインタラクティブを志向する音楽もここに分類可。

1. 音楽の〈あり方〉を手がかりとする音楽の時代的変遷（概観）



この大変化の根本的要因は？

註1). ソラントスケー、シラターレー、ソイロのミーナル、物語と共にある音楽。あるいはある種の音楽音楽やインタラクティブを志向する音楽もここに分類可。

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 歴史学上の時代区分の確認 中世とは？ 近世とは？ 近代とは？

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 歴史学上の時代区分の確認、中世とは？ 近世とは？ 近代とは？

中世 (middle ages) とは 467年頃～1470年頃

近世 (early modern period) とは 1470年頃～1780年頃

近代 (modern ages) とは 1780年頃～1970年頃

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 歴史学上の時代区分の確認 中世とは？ 近世とは？ 近代とは？

中世 (middle ages) とは

467年頃～1470年頃

神 (カトリック) 中心の世

封建性の時代。地方では領主と農民による封建社会 (荘園制度)。領主は緩やかにまとまった国に属する。国には一応の国王がいるが、国王はローマ教皇 (宗教権威) と神聖ローマ皇帝 (軍事的権威) に仕えている。教皇と皇帝の権力が絶大なため、結局、地方の領主は、直属の国王よりも教皇と皇帝の支配に従う。

近世 (early modern period) とは

1470年頃～1780年頃

近代 (modern ages) とは

1780年頃～1970年頃

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 歴史学上の時代区分の確認

中世 (middle ages) とは

467年頃～1470年頃

神 (カトリック) 中心の世

封建性の時代。地方では領主と農民による封建社会 (荘園制度)。領主は緩やかにまとまった国に属する。国には一応の国王がいるが、国王はローマ教皇 (宗教権威) と神聖ローマ皇帝 (軍事的権威) に仕えている。教皇と皇帝の権力が絶大なため、結局、地方の領主は、直属の国王よりも教皇と皇帝の支配に従う。一方、

近世 (early modern period) とは

1470年頃～1780年頃

国王中心 (特別に強い人間が中心)

封建制衰退ののち、**主権国家体制への準備と誕生の時代**。国王が教皇らの支配から離れた**国王主権の段階**。1648年ウェストファリア条約でこの体制が正式に誕生した。

近代 (modern ages) とは

1780年頃～1970年頃

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 歴史学上の時代区分の確認

中世 (middle ages) とは

467年頃～1470年頃

神 (カトリック) 中心の世

封建性の時代。地方では領主と農民による封建社会 (荘園制度)。領主は緩やかにまとまった国に属する。国には一応の国王がいるが、国王はローマ教皇 (宗教権威) と神聖ローマ皇帝 (軍事的権威) に仕えている。教皇と皇帝の権力が絶大なため、結局、地方の領主は、直属の国王よりも教皇と皇帝の支配に従う。

近世 (early modern period) とは

1470年頃～1780年頃

国王中心 (特別に強い人間が中心)

封建制衰退ののち、**主権国家体制への準備と誕生の時代**。国王が教皇らの支配から離れた**国王主権の段階**。1648年ウェストファリア条約でこの体制が正式に誕生した。

近代 (modern ages) とは

1780年頃～1970年頃

市民が中心 (人間中心, ただし知的な人間に限る)

民主的な主権国家体制が確立した時代。国民が国王の支配から離れた**国民主権の段階**。1789年フランス革命で正式に誕生。

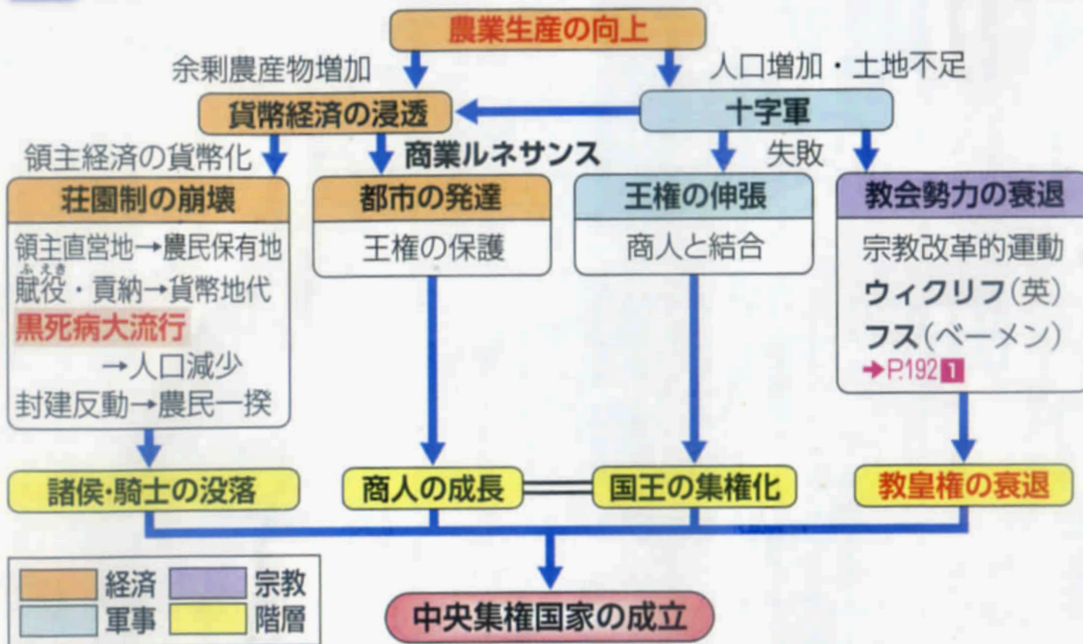
2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

『アカデミア世界史 (2016改訂版)』 浜島書店、2018年、174頁。

1 封建制の崩壊・中央集権国家の成立

P.167
P.194



近世における「主権国家体制の確立」

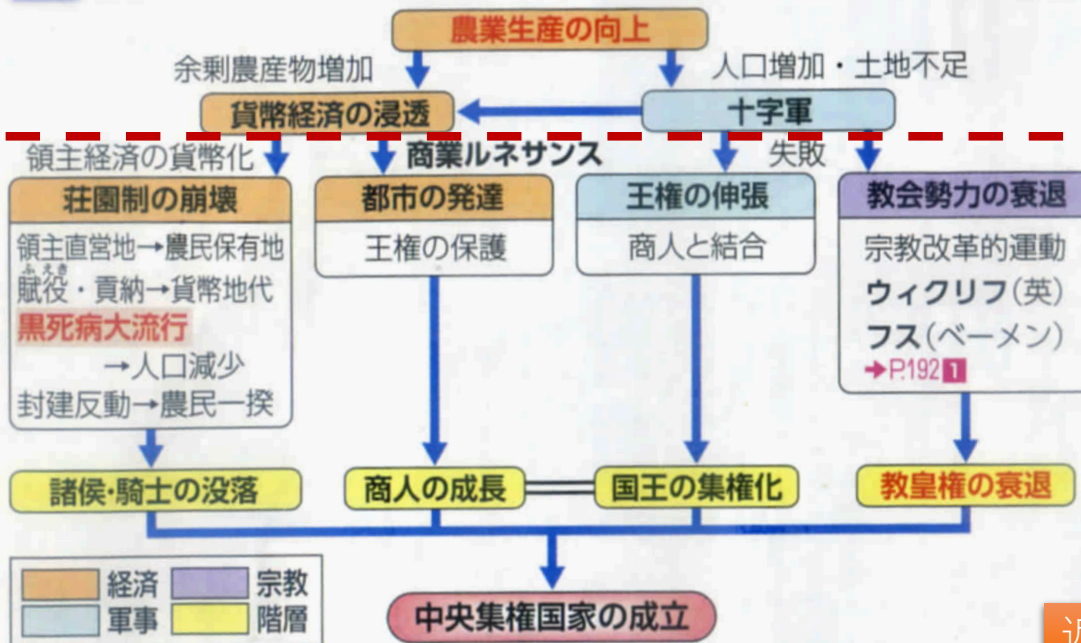
2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

『アカデミア世界史 (2016改訂版)』 浜島書店、2018年、174頁。

1 封建制の崩壊・中央集権国家の成立

P.167
P.194



中世

近世

近世の完成

近世における「主権国家体制の確立」

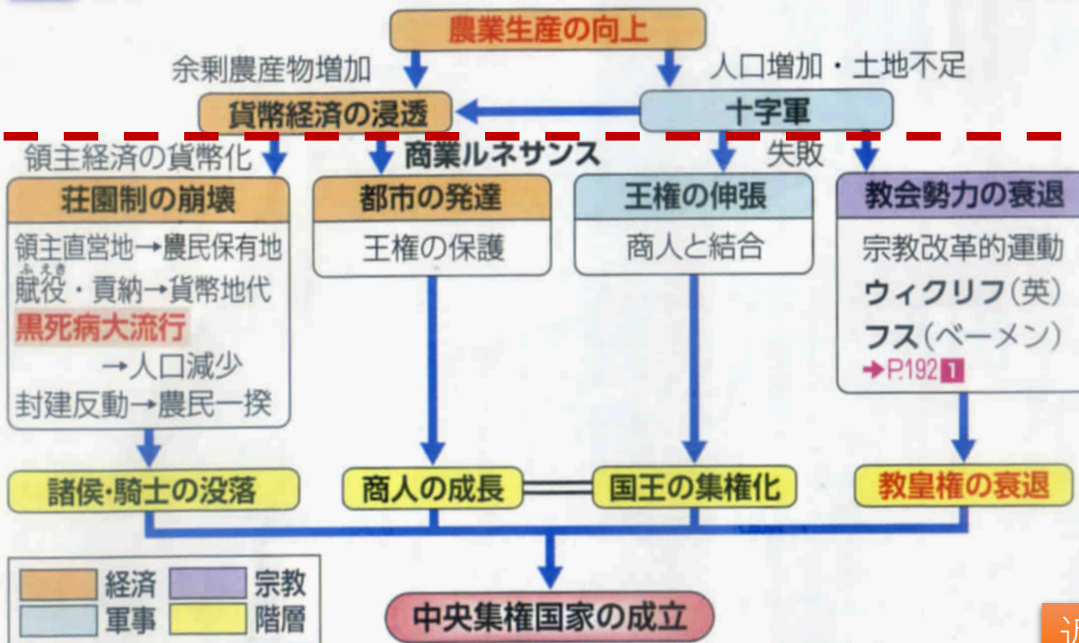
2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

『アカデミア世界史 (2016改訂版)』 浜島書店、2018年、174頁。

1 封建制の崩壊・中央集権国家の成立

P167
P194



近世における「主権国家体制の確立」

中世

近世

1. 貴族が特権維持のため主権国家を希求
2. 商人が市場をもとめ主権国家を希求
3. カトリック教会の勢力衰退
4. 農民が封建制のため主権国家を希求

近世の完成

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

12C~17C までに何が ?

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説：カトリックへの信頼低下)

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、 「宗教」 信仰 から、合理的なる 「経済」 追求へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、「宗教」信仰 から、合理的なる「経済」追求へ
- ・ より大規模な経済活動を統一的・合理的に取り締まる強い統治への希求 → 王侯による「主権国家体制」へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

しかし、
これらの変化を根本的に導いた
そもそものきっかけとなる
出来事が最初にあったのでは？

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、「宗教」信仰 から、合理的なる「経済」追求へ
- ・ より大規模な経済活動を統一的・合理的に取り締まる強い統治への希求 → 王侯による「主権国家体制」へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)

13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

そもそも、最初のこのあたりの時期に、何か重大なことがあったのでは？

- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、「宗教」信仰 から、合理的なる「経済」追求へ
- ・ より大規模な経済活動を統一的・合理的に取り締まる強い統治への希求 → 王侯による「主権国家体制」へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)

(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)



13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

- ・ 理性の発見 = 人間的可能性の追求 (知恵や科学、技術革新・合理性)
- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、「宗教」信仰 から、合理的なる「経済」追求へ
- ・ より大規模な経済活動を統一的・合理的に取り締まる強い統治への希求 → 王侯による「主権国家体制」へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)
(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-1. 時代背景

10世紀頃 中世 = 「カトリック と 音楽」 (神を讃える音楽)



13世紀頃から
中世は変化
なぜ？

「十二世紀ルネサンス」 = 西欧における古代ギリシャ由来の、アラビア科学 (理性)の発見 (12C. スペイン)

- ・ 理性の発見 = 人間的可能性の追求 (知恵や科学、技術革新・合理性)
- ・ ローマ教皇の主導による、聖地エルサレム奪回作戦の失敗 → (通説 : カトリックへの信頼低下)
- ・ 宗教改革 (15世紀) で、神学においてもカトリックに批判的検討がなされ、威信がさらに低下する。
- ・ 農業と商業の生産性が向上する。市場と貨幣経済が生まれ、生活が潤う。
- ・ 人 (農奴, 諸侯) の幸福追求の手段の矛先が、「宗教」信仰 から、合理的なる「経済」追求へ
- ・ より大規模な経済活動を統一的・合理的に取り締まる強い統治への希求 → 王侯による「主権国家体制」へ

17世紀頃 近世 = 「王侯(人間) と 音楽」 (王を讃える音楽)

(音楽における人間中心主義のはじまり。神から人間への第一歩。)

2. 「王侯と音楽」：バロック音楽としての近世音楽の概観

2-2. 十二世紀ルネサンス

科学史的「十二世紀ルネサンス」

(伊東俊太郎, ピエール・デュエム, マーシャル・クラゲットらがそれぞれ研究)

- ・ 12世紀まで「暗黒の時代」であった「**西欧中世が、イスラム文明と接触し、その優れた成果を取り入れ、消化し、その後の知的離陸の地盤を獲得した大変革期**」(伊東, p.21)を示す科学史上の用語。
- ・ 「そのときまで、実は西欧は、ユークリッドも知りません。(略)アルキメデスという有名な科学者のことも知らない。プトレマイオスという、ギリシャ最高の天文学者(略)これも知らない。ヒポクラテスやガレノス(※医学)も知らない。さらには、有名なアリストテレスの著作のほとんど知られていなかった」(伊東、p.21-22)
- ・ 「**十二世紀になって、西欧はアラビア、ビザンティンを介して、こういうギリシャの第一級の学術と始めて出会うわけです。そこでやっと文明の仲間入りをする、と言ってもいいくらいのもので、それまでは西欧世界は世界文明史のまったくの辺境にうずくまっていたといえます**」(伊東、p.22)

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-2. 十二世紀ルネサンス

中世 (middle ages) とは

467年頃～1470年頃

神 (カトリック) 中心の世

封建性の時代。地方では領主と農民による封建社会 (荘園制度)。領主は緩やかにまとまった国に属する。国には一応の国王がいるが、国王はローマ教皇 (宗教権威) と神聖ローマ皇帝 (軍事的権威) に仕えている。教皇と皇帝の権力が絶大なため、結局、地方の領主は、直属の国王よりも教皇と皇帝の支配に従う。

近世 (early modern period) とは

1470年頃～1780年頃

国王中心 (特別に強い人間が中心)

封建制衰退ののち、**主権国家体制への準備と誕生の時代**。国王が教皇らの支配から離れた**国王主権の段階**。1648年ウェストファリア条約でこの体制が正式に誕生した。

近代 (modern ages) とは

1780年頃～1970年頃

市民が中心 (人間中心, ただし知的な人間に限る)

民主的な主権国家体制が確立した時代。国民が国王の支配から離れた**国民主権の段階**。1789年フランス革命で正式に誕生。

2. 神中心の中世から、人間中心の萌芽の近世へ：それはなぜ起こったか

2-2. 十二世紀ルネサンス

中世 (middle ages) とは

467年頃～1470年頃

神 (カトリック) 中心の世

封建性の時代。地方では領主と農民による封建社会 (荘園制度)。領主は緩やかにまとまった国に属する。国には一応の国王がいるが、国王はローマ教皇 (宗教権威) と神聖ローマ皇帝 (軍事的権威) に仕えている。教皇と皇帝の権力が絶大なため、結局、地方の領主は、直属の国王よりも教皇と皇帝の支配に従う。

一方、12Cにおけるイスラム文明との接触を通じ、西欧がはじめて人間の「理性」を発見した時代。

近世 (early modern period) とは

1470年頃～1780年頃

国王中心 (特別に強い人間が中心)

封建制衰退ののち、主権国家体制への準備と誕生の時代。国王が教皇らの支配から離れた国王主権の段階。1648年ウェストファリア条約でこの体制が正式に誕生した。なお人間においては、「理性」を模索した時代。

近代 (modern ages) とは

1780年頃～1970年頃

市民が中心 (人間中心, ただし知的な人間に限る)

民主的な主権国家体制が確立した時代。国民が国王の支配から離れた国民主権の段階。

1789年フランス革命で正式に誕生。理性を体系化して最大限の信頼をおき、その可能性を徹底追求した時代。

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-1. 〈ルネサンス〉の歴史学での受容について

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-1. 〈ルネサンス〉の歴史学での受容について

・ルネサンス Renaissance (仏) の起源

- 19世紀フランスの歴史家 ジュール・ミシュレが 1840年に大学講義において「創造」して使用した語。
- 「それまで、美術、文学、科学、宇宙学、地理学、解剖学、自然学などで使われていたルネサンスという用語を、それらの全体性を捉える、中世を批判する歴史的概念として（renaissance の頭文字を r でなく大文字 R として）初めて創造したのである」（松村, 61 [335]）。
- ルネサンスの語の初出
「1840年1月6日から始まったコレージュ・ド・フランスでの講義は、中世史がちょうど終わり近代史に入ったところであり、『ルネサンス Renaissance』と名付けられた」（松村, 62 [336]）。

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-1. 〈ルネサンス〉の歴史学での受容について

- ・ルネサンスは、〈近代のはじまり〉か〈中世のおわり〉かの歴史論争
 - スイスの歴史家ブルクハルトは、古典的名著『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)において、〈ルネサンスが近代のはじまり〉であることを主張した。
 - 一方、オランダの歴史家ホイジンガーは、古典的名著『中世の秋』(1919)において、〈ルネサンスは中世の秋〉であることを主張した。
 - その後、アメリカの歴史家ハスキンスは、著作『十二世紀ルネサンス』(1927)において、15世紀頃のイタリア・ルネサンスに先立って、12世紀頃からギリシャの古典の発見がなされていたことを主張した。

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. 〈ルネサンス〉の歴史学での受容について

- ・ 現在での一般的なルネサンスの歴史的区分の需要
 - 今日では、ルネサンスを「近世」のはじまりと認識するのが一般的。
たとえば、国内の高校世界史教材として知られる『詳説改訂版山川世界史B』では2000年以降、ルネサンスを「近世」と扱っている。

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

歌詞の内容伝達を重視する音楽 = 「オペラ」（詩-物語-音楽の融合を意図）

音楽サークル「カメラータ」（1600年頃，イタリア・フィレンツェ）

- 同時代の宗教音楽であるパレストリーナなどの〈多声音楽〉に音への偏りをみて問題視した。
- 〈イタリア・ルネサンス〉の流れでギリシャの古典文化が研究される。
- 詩と音楽の理想的融合の範 → 〈ギリシャ悲劇〉に理想を見出した。
- 17Cイタリアにおいて、〈ギリシア悲劇の復興〉を目指した。
- 歌詞を重視する音楽であるため、物語における感情表現を行なえる可能性がうまれた。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父)などが参加

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

歌詞の内容伝達を重視する音楽 = 「オペラ」（詩-物語-音楽の融合を意図）

音楽サークル「カメラータ」（1600年頃，イタリア・フィレンツェ）

- 同時代の宗教音楽であるパレストリーナなどの〈多声音楽〉に音への偏りをみて問題視した。
- 〈イタリア・ルネサンス〉の流れでギリシャの古典文化が研究される。
- 詩と音楽の理想的融合の範 → 〈ギリシャ悲劇〉に理想を見出した。
- 17Cイタリアにおいて、〈ギリシア悲劇の復興〉を目指した。
- 歌詞を重視する音楽であるため、物語における感情表現を行なえる可能性がうまれた。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父)などが参加

→ これが「オペラ」の誕生

世界初の本格的オペラ『オルフェオ』（1607）
（クラウディオ・モンテベルディ作曲）。ギリシャ神話にまつわる話。

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

歌詞の内容伝達を重視する音楽 = 「オペラ」（詩-物語-音楽の融合を意図）

- 詩と音楽の理想的融合の範 → 〈ギリシャ悲劇〉に理想を見出した。
- 歌詞を重視する音楽であるため、音楽を物語における感情表現で利用する可能性がうまれた。

どうやって歌詞を重視する音楽を作ったか？

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

歌詞の内容伝達を重視する音楽 = 「オペラ」（詩-物語-音楽の融合を意図）

- 詩と音楽の理想的融合の範 → 〈ギリシャ悲劇〉に理想を見出した。
- 歌詞を重視する音楽であるため、音楽を物語における感情表現で利用する可能性がうまれた。

どうやって歌詞を重視する音楽を作ったか？

〈一人の歌手〉と〈楽器の伴奏〉のスタイルによって、歌詞が聞き取りやすい音楽の形が生まれた

→ **〈モノディー様式〉** これがオペラの「レチタティーヴォ」と「アリア」へ

monody (英)

3. 〈イタリア・ルネサンス〉が生んだ音楽：オペラ

3-2. フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」（1600年頃）

歌詞の内容伝達を重視する音楽 = 「オペラ」（詩-物語-音楽の融合を意図）

【聞き比べ】



作曲: パレストリーナ （中世末期, 多声音楽様式, ミサで使用）

《ミサ・ナシェ・ラ・ジョイア・ミア Missa Nasce La Gioja Mia》 - Kyrie (1590)



作曲: A. スカルラッティ （近世, モノディ様式, オペラで使用）

アリア 《董すみれ》 - オペラ「ピッコとデメートリオ」より（1694年初演）

※ 楽譜『イタリア歌曲集』で有名。今日の音楽学校の声楽科では必ず歌う曲の一つ。

4. 近世〈主権国家体制〉が生んだ音楽：絶対王政下のバロック音楽

4-1. 近世的〈主権国家体制〉としての〈絶対王政〉

4. 近世〈主権国家体制〉が生んだ音楽：絶対王政下のバロック音楽

4-1. 近世的〈主権国家体制〉としての〈絶対王政〉

中世 = 封建制

- ・土地を媒介とする、領主と農民の主従関係
- ・教皇・皇帝と、王侯・領主との主従関係

近世（以降） = 主権国家体制

「主権国家とは、国内の統治力と対外的な独立性をもった国家で、教皇・皇帝というヨーロッパを普遍的に支配した権力が衰えた16世紀の絶対王政を始まりとする。

このような国家が対等な外交関係をもとに自国の利益を優先して競い、勢力均衡をはかりあった結果成立した国際秩序が主権国家体制であり、1648年ウェストファリア条約により確立した」

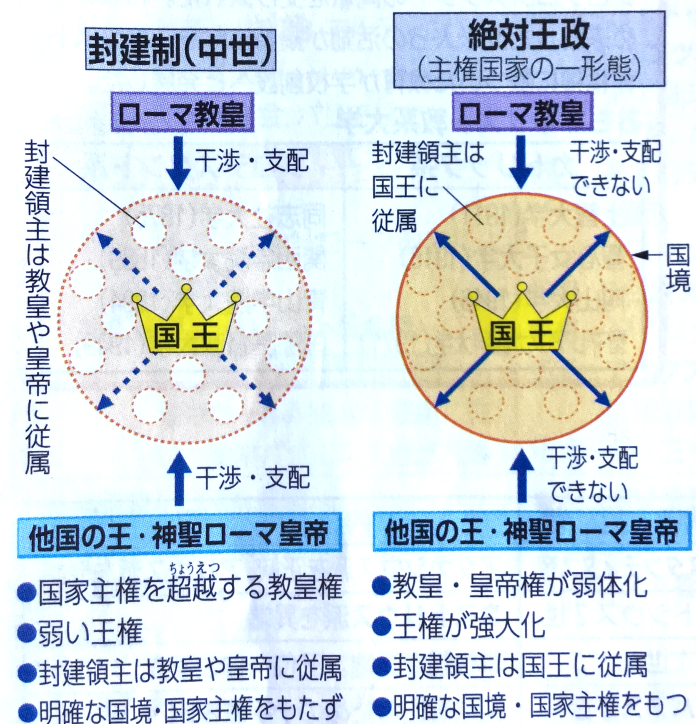
浜島書店『アカデミア世界史』p.194より

4. 近世〈主権国家体制〉が生んだ音楽：絶対王政下のバロック音楽

4-1. 近世的〈主権国家体制〉としての〈絶対王政〉

『アカデミア世界史(2016改訂版)』 浜島書店、2018年、194頁。

● 封建制と絶対王政の違い ← P167 1



4. 近世〈主権国家体制〉が生んだ音楽：絶対王政下のバロック音楽

4-2. バロック音楽：王を讃う音楽

西欧近世 (17 C ~ 18 C) は

「絶対王政」の時代



「正殿」

<http://bienvenue.chateauversailles.fr/en/accueil>

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「ラトナの泉水」と「大運河」

http://promptguides.com/paris/_photos/versailles/versailles_008.jpg

Marc Lagneau

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「オランジュリー庭園」と「スイス人の池」
<https://ciejai.files.wordpress.com/2013/11/dscn08201.jpg>

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「鏡の回廊」

http://en.wikipedia.org/wiki/Hall_of_Mirrors

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



現地で借受けるオーディオガイド

フランス 「ブルボン朝」

ベルサイユ宮殿



「鏡の回廊」

http://en.wikipedia.org/wiki/Hall_of_Mirrors

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



「王室オペラ劇場」

<http://jp.chateauversailles.fr/jp/discover-the-estate/the-palace/le-chateau/lopera-royal-jp>

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「王室オペラ劇場」

Photo récupérée sur le site de l'opéra royal de Versailles

フランス 「ブルボン朝」

ベルサイユ宮殿



「王室オペラ劇場」

Photo récupérée sur le site de l'opéra royal de Versailles

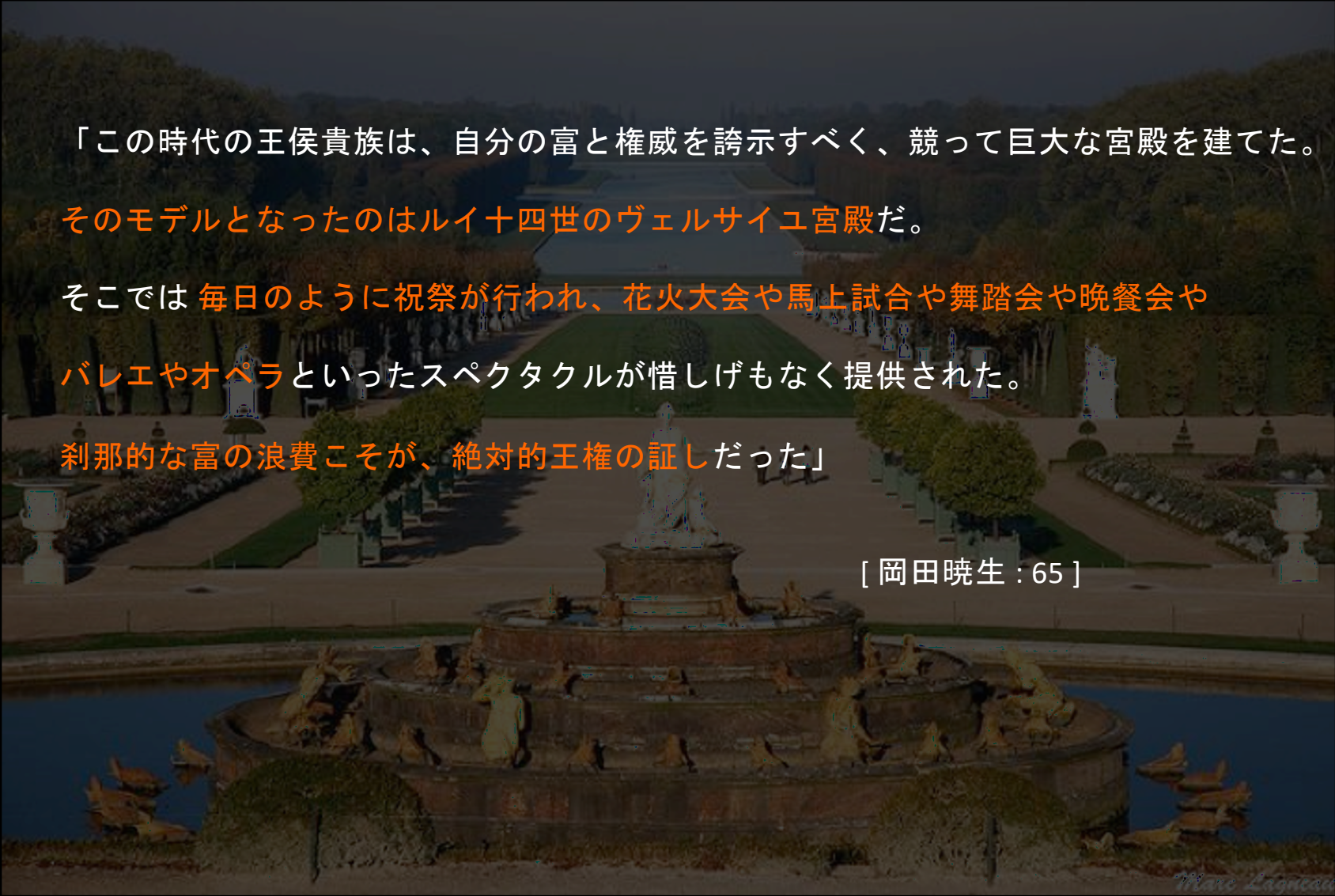
フランス

「ブルボン朝」

ベルサイユ宮殿



M. de Lagarde



「この時代の王侯貴族は、自分の富と権威を誇示すべく、競って巨大な宮殿を建てた。

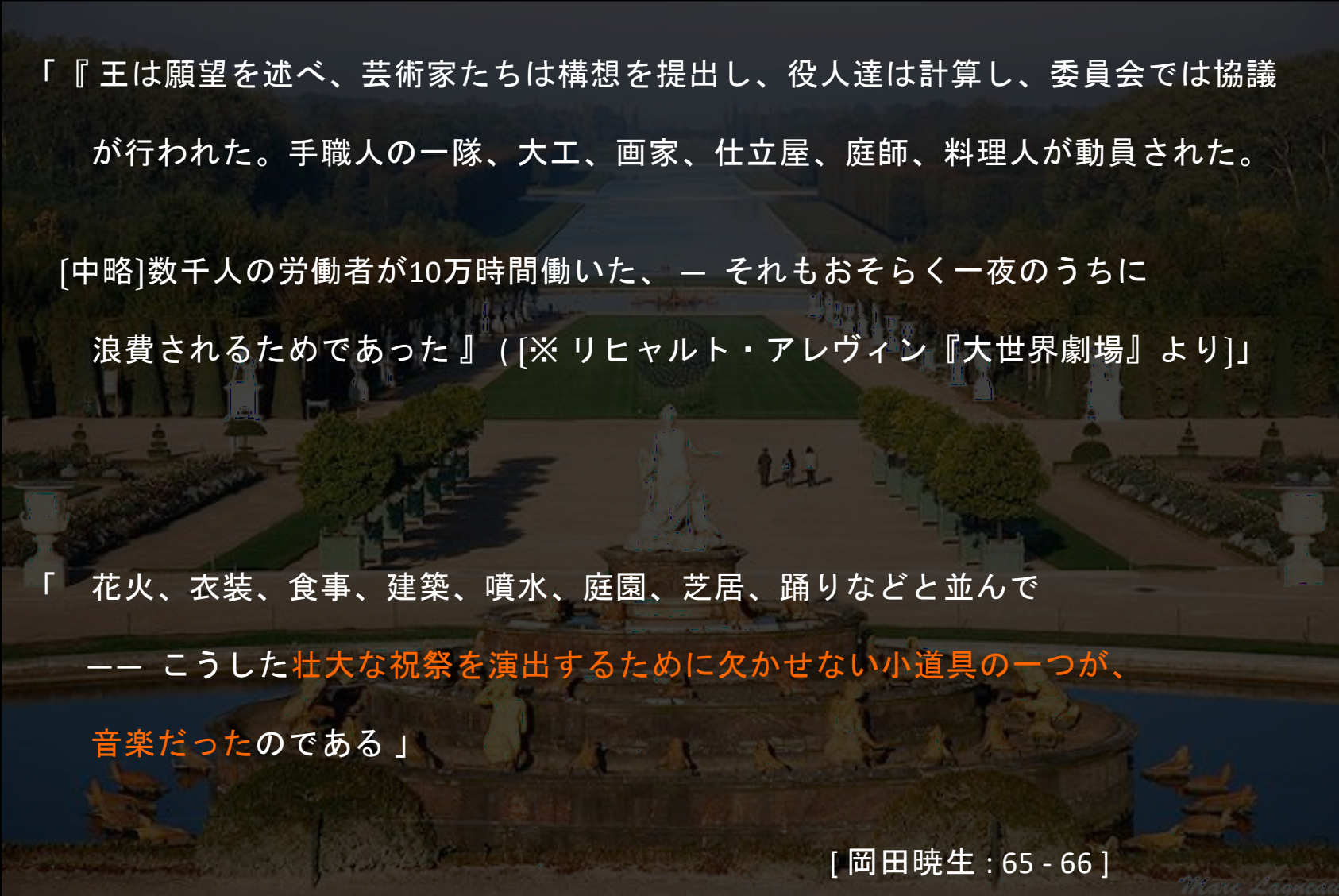
そのモデルとなったのはルイ十四世のヴェルサイユ宮殿だ。

ここでは 毎日のように祝祭が行われ、花火大会や馬上試合や舞踏会や晩餐会や

バレエやオペラといったスペクタクルが惜しげもなく提供された。

刹那的な富の浪費こそが、絶対的王権の証しだった」

[岡田暁生 : 65]



「『王は願望を述べ、芸術家たちは構想を提出し、役人達は計算し、委員会では協議が行われた。手職人の一隊、大工、画家、仕立屋、庭師、料理人が動員された。

[中略]数千人の労働者が10万時間働いた、— それもおそらく一夜のうちに浪費されるためであった』 ([※ リヒャルト・アレヴィン『大世界劇場』より])

「花火、衣装、食事、建築、噴水、庭園、芝居、踊りなどと並んで— こうした壮大な祝祭を演出するために欠かせない小道具の一つが、音楽だったのである」

[岡田暁生 : 65 - 66]

近世の音楽 = バロック音楽の最も大きな特徴

王を讃える音楽

ルイ14世 と 作曲家リュリ



ルイ14世「太陽王」在位 1643-1715
バレエ好きなフランス国王



ルイ14世の宮廷楽長。イタリア生まれ。
フランス貴族社会で権勢をほしいままにした。
喜劇作家 モリエール(脚本)との共作し、
「コメディ=バレ」を創作。

ルイ14世 と 作曲家リュリ

映画 『王は踊る』

(*Le Roi danse* , 2000制作, ジュラール・コルビオ監督, ベルギー)

- 作曲家 ジャン=バティスト・リュリの生涯を描いた映画
- 当時の宮廷と音楽との関係がよく描かれている映画
- 1653年に宮廷で自ら「太陽王」に扮して上演したバレエ『夜のバレエ』の様子も。
- バレエ『夜のバレエ』 (Le Ballet Royal de la Nuit)
- 貴族の反乱(フロンドの乱)を制圧した直後の公演であった。
- 『夜』は彼の権力を誇示する機会となり、以後「絶対王政」が開始される。
- 当時、ルイ14世は15歳。

参考資料 [白石 , 1991]

※ ルイ14世は背を高く見せるために「ハイヒール」をはくことを好んだ。映画でそれにちなんだ描写もあり。

映画『王は踊る』（2000年）より（6分程度）



1653年、15歳のルイ14世が「太陽王」に扮して上演した宮廷バレエ『夜のバレエ』の様子。イタリア人作曲家リュリはルイ14世の寵愛を受けて宮廷楽長となり権勢をふるい、1661年にはフランス国籍を得た。王を讃えるために音楽を書いたリュリにおいて、バロック音楽の社会的側面の一つの典型をみることができる。尚、バレエ中の音楽にリュリがうみだした「フランス風序曲」の様式が聞ける。つまり、2拍子における緩やかなテンポ、その中での付点音符による長 - 短の威厳あるリズムの繰り返しである。

youtubeでみつけた
現代版『夜のバレエ』

映画で聞いたリュリの
音楽も冒頭にあり。

なによりも
舞台演出に
目を見張った。



YouTube^{JP}

検索

Le Ballet Royal de la Nuit (ル・バレ・ロワイアル・デ・ラ・ヌイ) 『夜のバレエ』

振り付け：セバスチャン・ドゥセ

<https://youtu.be/hgoouzWghFg>



S'ABONNER

▶ ⏪ 🔊 40:13 / 3:16:46



Le Ballet Royal de la Nuit (Correspondances / Sébastien Daucé)

62,450 回視聴 • 2018/08/01

👍 913 💬 57 ➦ 共有 ≡+ 保存 ⋮

【近世とその音楽のあり方のまとめ】

1/2

- ・ 〈十二世紀ルネサンス〉により、西欧の人々は、歴史上初めて〈人間理性〉を発見した。
- ・ 理性による合理性を追求することで、農業や商業が発達し、市場における貨幣経済が生まれた。
- ・ 農民や商人は地位が向上し、封建制が揺らいだ。
- ・ 合理性の追求により、カトリック信仰にも疑念が生じ、宗教改革によりその旧勢力が衰退した。
- ・ 当時の西欧人は、カトリック勢力より、大規模で合理的なシステムを管理しうる主権国家を希求し確立した。つまり、**神中心から人間中心の生活へと意識が大きく変化**しはじめた。

【近世的な音楽のあり方のまとめ】

2/2

- ・ その中で、音楽に携わる者も変化した。
- ・ 自らの身の安全と活動の維持のため、**神よりも、王を讃う音楽へと、音楽を捧げる対象が変化した。**
- ・ 宮廷では、王を讃え、また王の歓心を得るために、**豪華絢爛で、壮大で劇的な表現がとめられた。**
- ・ その具体的方途は多声音楽よりも、同時代のルネサンス的理念から誕生したオペラがふさわしかった。
- ・ ただし、当時の音楽家には、自らの精神的内面の表現という発想はなかった。
- ・ 上記がまさに、近世的あり方の音楽である。
- ・ 以上をふまえ、**近世的音楽とは、絶対王政の世の本質を、図らずもミメーシス（模倣）したものと考えてみたい。**

参考文献・さらなる知識のために

●【中世から近世へ：なにがそれを導いたか】

- ・『アカデミア世界史』(2016年改訂版)、浜島書店、2018年。
- ・木村靖二『詳説改訂版世界史B』(2016年文科省検定済)、2017年、山川出版社。
- ・水村光男『この一冊で世界の歴史がわかる!』1996年、三笠書房。
- ・『岩波講座・世界歴史 16 : 主権国家と啓蒙』、1999年、岩波書店。
- ・草光俊雄『ヨーロッパの歴史(1): ヨーロッパ史の視点と方法(放送大学教材)』、2015年、放送大学教育振興会。
- ・伊藤俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫、2006年 (歴史学ではなく、科学史からのルネサンス観)。

●【ルネサンスについて】

- ・ヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化(上・下)』、1860年=1974年、中公文庫。
- ・ヨハン・ホイジンガ『中世の秋(上・下)』、1919=1976、中公文庫。
- ・ジェリー・ブロン『はじめてわかるルネサンス』2013、ちくま学芸文庫。
- ・松村高夫「社会史の認識論的一系譜：ヴィーコからミシュレへ、さらにファールブルへ」『三田学会雑誌』(Vol.96, No.3)、慶應義塾大学経済学会、2003年、pp.315(41)-343(69)。

参考文献・さらなる知識のために

●【近世の音楽：バロック音楽】

- ・岡田暁生『西洋音楽史』、中公新書、2005年。
- ・ドナルド.H.ヴァン.エス『西洋音楽史：音楽様式の遺産』、新時代社、1970年=1986年。
- ・白石嘉治「踊る王から見る王へ：ルイ14世治下におけるオペラ再興の一断面」『Les Lettres francaises』11号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会、1991年。